

祈りの友 第184号

2022年6月

5月にフレッドとジェイン田中宣教師が日本 CEF 本部を去り、高齢者施設に入居しました。皆様の篤いお祈りに支えられましたことを心から感謝いたします。フレッド師が宣教師生活 50 周年記念の時(2013 年)に書いた回想録を数回に亘って掲載いたします。

日本の子どもの救いのために①



フレッド 田中

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について感謝しなさい。」
(1テサロニケ 5章16-18節)

はじめに

私は、移民家族の二世として、1933年4月カナダで生まれました。そして1963年9月CEFの宣教師として来日しました。

私の人生で最大の出来事と喜びは、私の身代わりとして十字架上で死んで、三日目によみがえってくださった主イエス キリストを、自分自身の罪とその永遠の刑罰からの救い主として信じ、心にお迎えすることによって、罪が赦され、救われた事です。

過去を振り返ってみますと、非常に残念で、悲しい思い出があります。それが、私が救われてからの50数年間、児童伝道に携わってきた大きな理由の一つです。

その過去にふれながら、私に児童伝道の召命を与え、日本宣教の道に導かれたご真実な主をあかしします。

楽しかったけれども、 救いのない、希望もなかった教会時代

1933年4月9日、農家の5人目に三男として生まれた私は、4歳ごろから兄妹たちとともに、片道4.5kmもあった教会に通った。第二次世界大戦中、4年間の収容所生活中もほとんど休むことなく忠実に通った。

しかし、10年間通っても、兄妹の誰一人、救われなかった。なぜだろう？

福音伝道がされていなかったのである。

福音伝道ができるもっともよい機会であるクリスマスに、救い主ではなく、サンタクロース、プレゼント、ストーリーや楽しい劇などだけ。イースターは、もっと悲しい。罪、イエスさまの血、十字架、復活の具体的な意味はほとんど語られず、たまごさがしなどゲーム中心のものしか、私の記憶には残っていない。

「おお主よ、教会が同じようなサタンの策略に陥らないよう、守ってください。」

強制収容所へ

ジャパンがアメリカと戦争をはじめた。ハワイのパール・ハーバー(真珠湾)の不意打ち爆撃だった。

そのニュースがアメリカ全土、カナダに瞬く間に広まった。ラジオも電気もない田舎百姓の田中家にも届いたのである。

私は、5人の兄妹たちと普段通り、3マイル(約4.8km)の砂利道を歩いて、田舎の2教室学校(1年生—3年生の1教室と4年生—8年生の1教室)に行ったが、校内の雰囲気が変わっていた。これまで暖かだったみんなのまなざしが、一変して冷たく感じられた。

あちらこちらでジャップ(日本人野郎)という言葉が聞こえるようになった。数人の友達以外は…昨日の友は、今日の敵…。間もなく、政府から通達が来た。

「18歳以上の男性は全員、近日中に、緊急仮設住宅づくりに強制出動」と命じられた。各家庭は頼りになる男不在となった。不安が数か月続いた。

数か月後、土地、家、家財一切をあとに、手で持てるだけ持って、ロッキー山脈の山中へ。車で160km さらにトラックの荷台でこぼこ道を揺られ、収容所に到着。これから4年間住むことになる仮設住宅に入った。

ロッキー山脈の山中の小さな盆地は、冬には池や湖が一面20~30cmの厚さに凍りつき、雪もかなり積もった。屋根や歩道の雪かきをすると、歩道の横に2m以上の雪壁ができるほどだった。

そこは、大自然の恵みが豊かだった。山中ではいろいろな動物をこの目でみた。黒熊、鹿、狼、コヨーテ、山猫、山ヤギ、ウサギ、ビーバー、ミンク、スカンク等。川にはニジマス、ヤマメ等。マツタケ、多種のきのこ、ブルーベリー、ワラビ、フキ等、山菜、花や植物も多かった。

電気はなく、照明は灯油ランプ、ランタン、ローソク。

暖房・炊事は薪ストーブだった。薪は定期的に届けてくれていた。

水は各家に外側一か所、パイプで引いた蛇口があった。川から引いていた水だったので、いつも特殊な布袋を蛇口に取り付け、なるべくきれいな水を使用するよう心掛けていた。凍結することも度々あり、防止策を考える必要があった。

トイレは外にあった。背中向き合わせの四件の家の空き地の中央にひとつ、四家族用の小屋があり、中は四つに仕切られていた。深い穴の上に人が座れるように板を張り、その真ん中に丸い穴が作られていた。寒い冬、悪天候、真っ暗な夜などはとても大変だった。

風呂場も洗濯場も家にはなく、100mぐらい離れた共同建物(約50家族用)が数

か所あった。共同風呂は時間が決められていた。わんぱく小僧たち(私も)は一番風呂に入って、お湯遊びをして楽しんでいた。

4年間、豊かではなかったけれど、衣食住は保障され、何の不自由もなかった。外部からの攻撃やそれに伴う精神的苦痛から逃れられ、守られていた。9歳の私にとっては、たくさんの同人種の仲間(約400家族がいた)ができ、楽しかった4年間だったと言える。しかし、親たち、成人していく若者たちにとっては、将来の見通しのない不安な内面的苦痛の日々だったと思う。

大戦の終了直後、カナダ政府の勅令があった。思いもよらない厳しいものだった。「戦前、西海岸周辺に土地建物を所有していた者は、そこに帰るべからず。」

私の親たちは借金をし、土地を開墾し、何年もかけてやっと農産物を生産しはじめ、借金の返済が終わったばかり。その土地を取り上げられたのも同然だった。

さらに、一年以内に収容所の閉鎖が決まった。政府は二つの条件を出し、どちらか一つを選ぶべしと命じた。

1. カナダの中部、あるいは東部に移住する
2. 日本に、引揚者として帰国する

カナダ政府が出した二つの条件は、どちらも、保障なき先の見えないものだった。両親は日本行きを選んだ。

(7月号に続きます)

日本CEF(日本児童福音伝道協会)

〒311-3434 茨城県小美玉市栗又四ヶ2421-6

TEL 0299(28)2031 URL: <http://www.cef.or.jp>

献金振替 00160-1-59313

(宗) 日本児童福音伝道協会